

# 民藝のある暮らし



お気に入りを探せる  
民藝品  
全国MAP

桐島かれんさんと巡る  
民藝の街「松本」



手仕事の布が好き  
小澤典代さん

田舎暮らしの生活になじむ  
徳田民子さん

一番好きなものは「かご」  
引田かおりさん

「用の美」は暮らしのお手本  
石村由起子さん

かご、南部鉄器、こぎん刺し、藍染、  
漆器、ワインザーチェア…



民藝の織物が、生活の中に  
形を変えてあふれています

染織作家

吉田美保子さん

PROFILE

吉田美保子さん

美術大学中退後、2年に渡りヨーロッパを放浪。東南アジアのテキスタイルと関係が深い企画の仕事についた後、2003年、染織吉田を設立。お客様と対話しながら作る「完全注文制作ONLY ONLY」にて、着物や帯を作る。通販サイト「some ori マーケット」では、ショール、バッグなどお手軽なものも購入可能。  
<http://www.someoriyoshida.com/>  
<http://www.someoriyoshida.com/shop>

10





## 愛着のある藍染の浴衣

「かれこれ10数年は着ています」という浴衣。「藍染の浴衣って流行がなく定番ですけど、本当にいいですよね。しつくりくるし、長く着れます」

柳宗悦さんの本はじめ、民藝に関する本が並びます。「柳さんの書かれた本からものづくりの真髄を学んでいます。『織り手は法への忠順な僕である』など、常に言葉で聞かせています」



「真によいものを観て、使うことで感性が磨かれる気がします」



1 「売上の10%を西日本豪雨の支援に充てたいなと思って、今ショールを織っている真っ最中なんです」

2 壁に飾られているのは、吉田さんが織った布の端きれをセンスよく配置し額装したタブロー。「some ori マーケット」でも通販しています。



## 吉田さん作の着物、帯

色鮮やかな着物、帯が並びます。どれも吉田さんのインスピレーションによって作られたオンリーワン。「糸の風合いや、色の重なりをどう表現するかを大切にしています」

受け継がれるものだから妥協しない  
オンリーワンの染織を

小さい頃から、素材を活かし、手作りのものが好きだったという吉田さん。絵を描くのが大好きだったという少女は、今では染めと織りの技術で、この世にひとつしかない織物の制作に日々全力投球しています。

「染織吉田」が大切にするのは、染めもONLY織りもONLYの完全オーダーメイドの織物作り。お客様が何を求めているのか、どのような場所に着ていくのかなどを丁寧に何度もやり取りし、イメージを具体化させ設計図に落としていきます。「お客様との話し合いに何よりも時間を使います。そこが一番大変な作業。デザインが決まってしまえば後は完成に向かって進めるだけです」

吉田さんの家に並ぶ柳宗悦さんの著書や織物に関する本。手仕事の精神論はそこから学んだそうです。作り手の立場として思うのは手作りだからいいってことはないし、昔ながらのをそのまま作ることもナンセンスということ。「現役の作り手の中にも素晴らしい方々はたくさんいらっしゃって、今の時代に合う本当にいいものを作り出しています。心から尊敬しています」



島根県に伝わる伝統工芸のおもちゃ、じょうきと鰐車。出雲大社の夏の風物として昔は競って作られたそう。「島根を旅した際に目にとまり、思わず購入してしまいました」

小さな頃から古いや手作りのものが好きだったので、民藝はずつと昔から私の身边にあったもの。手仕事をもののが好きですね」と語る吉田さん。

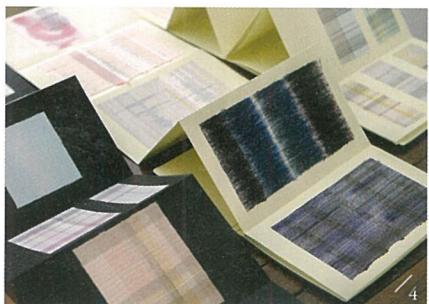
「私が織った着物や帯が、お召しくださる方の人生に豊かに寄り添い、娘さんやお孫さんまで受け継がれるとしたら…こんな幸せなことはありません。織りを仕事にしてよかつたなあと思います」

今新しく作られている手作りのものは、サイズ感が今の生活に合っていないと語る吉田さん。「昔は大きくて重いものがよいものだった。着物も重いほうが上等だといわれていたんですね。でも今は着やすさを求めて、薄くて軽いものが好まれます。いかにコンパクトにするか日々勉強中です」

## 大師匠から引き継いだ縞帳

縞帳とは、織物の端きれを貼り付けて記録したもの。「これは私の師の師。松本で染織をされていた森島千羽子先生の縞帳です。森島先生は、素朴な田舎の人でありながら、とてもモダンな感覚を持っていたそう。愛弟子だった私の師によると、柳さんやパートナー・リーチさんなどの話もよくされていたとか」

吉田さん自身の縞帳です。



## 先達たちのコースター

「上の写真は丹波布のコースターで、大阪の民藝館で求めた丹波布技術保存会のもの。下の写真は益子木綿で、日下田藍染工房で求めました。どちらも素晴らしいお仕事です。大きなものは買えないで、せめて小さなものを購入し、身近に使って、心意気みたいなものをもらっています」



## 昭和初期の織物を復元

戦前に活躍した不世出の染織家、青田五良氏の織物を吉田さんが忠実に再現した着物。「青田さんは元々は柳さんが京都で作った、上賀茂民藝協団のメンバーでした」。帯は「ブラッシングカラーズ」という吉田さん独自の技法で染織したもの。

青田五良著『上賀茂織之概念』。織りの技法書であり思想書。添付されている端布を復元しようと、吉田さんは解説通りに糸を準備し、手順通りに染め、縞を解析してデザインし、反物を織った。



こだわりの品は  
自然と長く愛用します



## パティックのショール

「インドネシア伝統のパティックは木綿ですが、これはシルクなんですね。今の暮らしに合うように工夫されていますね。着物のときも羽織代わりに重宝しています」



## アジアで作られた織物

「アジアの手仕事も本当にすごいです。これはマレーシアのイバン族の織物です。複雑なタテ縫なんですが、モチーフは夢に見たもので、神託なのであって」



## 愛用するふすべの小銭入れ

「小学生の頃印伝のがま口を買ってもらったことが、私の民藝好きのきっかけかもしれません。ふすべは印伝のルーツらしいのですが、この鹿革に触れたとき、当時のことを思い出しました。次はふすべの長財布が欲しいです」。バッグは吉田さんの布を服飾作家の善林英恵さんがデザインし、仕立てたもの。